

帰りがけに払います

宗教法人アシュラムセンター主幹牧師

榎本 恵

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。

イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乘せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカによる福音書 10 章 25-37 節)

1)もう一人の三人目

今日読んでいただいた聖書箇所は、大変有名な「善いサマリヤ人」の箇所です。イエスを試そうと「では、わたしの隣人とは誰ですか」と問いかけた律法の専門家に対して、イエスは、強盗に襲われ瀕死の状態になった旅人と三人の人物との出会いの物語を語ります。道の向こう側を通り過ぎた祭司とレビ人。そんな宗教家たちの姿とは対照的に、憐れに思い、近寄って手厚く介抱したサマリヤ人。この象徴的な譬えを示して、イエスは「あなたは、この三人の中で、誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と問いかけるのです。「その人を助けた人です」と答えた律法の専門家に、イエスは「行って、あなたも同じようにしなさい」と言われました。

「隣人は、彼を愛する行いを通してしかなることはできない」——単純でいて、しかし深い示唆に富んだ譬え話です。古今東西、このサマリヤ人の名を冠した教会や病院、施設は世界中に存在します。実は、私が今月一度奉仕している沖縄の精神科病院の名前も、「サマリヤ人病院」といいます。終戦後、アメリカの占領下にあった沖縄で、心の病に苦しむ人々を救いたいと立ち上がった一人のクリスチャン医師が設立した病院であり、私は現在、高齢化した患者の終末期医療の病棟で、チャプレンとして働いています。家族からも施設からも受け入れてもらえず、寝たきりのような状態になっている精神疾患を抱えた方々の病棟に関わりながら、「行って、あなたも同じようにしなさい」という主の言葉の重さを感じています。同時に、そこで懸命に働いておられる医師や看護師、介護士の皆

さんには、頭の下がる思いです。

イエスはこの三人の中で、「誰が隣人となったか」と問います。確かに、その三人とは一義的には祭司、レビ人、そしてサマリヤ人でしょう。しかし、私には、そこにもう一人の三人目がいるのではないかと思うのです。そう、サマリヤ人が追いはぎに襲われたその人をロバに乗せて連れていった宿屋の主人です。

サマリヤ人は、翌日、デナリオン銀貨二枚を預けて、「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います」と言い、傷ついた人を宿屋の主人に託したのでした。私は、この宿屋の主人もまた、「隣人となったのは誰か」というイエスの問いの候補者の一人だったのではないかと思うのです。

突然、当時のユダヤ社会では差別の対象であったサマリヤ人が、一人の重傷患者を連れてやってくる。しかも翌日には、その患者を置いて旅立ち、二デナリオン——すなわち当時の労働者の二日分の給料を手渡して面倒を見てほしいと頼んでくる。それは、ある意味において、宿屋の限界を超えた要求だったことでしょう。それを拒否することは、祭司やレビ人とはまた別の意味で、もっともな正当性があつたかもしれません。

残念ながら、聖書はこの後、宿屋の主人がどうしたのか、そしてサマリヤ人が無事に帰ってきたのかには触れていません。しかし、私はこの宿屋の主人もまた、隣人となったのではなかったかと思うのです。

2) *hospes*(ホスピス)と *hospitium*(ホスピティウム)

ところで皆さんは、末期がん患者の緩和ケア施設「ホスピス」の語源についてご存じでしょうか。実はこのホスピスの語源となったラテン語 *hospitium*(ホスピティウム)には、「客人をもてなす場所」という意味があるそうです。十一世紀、十字軍遠征で設けられた巡礼者や傷病者のための安息所として、その後、巡礼者や旅行者のための宿泊所・避難所となっていったといひます(一般財団法人エンドオブライフケア協会ホームページより)。

まさに、このサマリヤ人が重傷を負った旅人を運び込んだ宿屋こそが、後のホスピウムの原型となったのではないか、そんな想像力がかき立てられます。そして、その宿屋の主人とは、まさに現代のホスピスや病院(ホスピタル)で働く人たちのことではないでしょうか。

しかしそれは、医療従事者にだけ限定されるものではありません。クリスチャン医師であり、ホスピスの専門家である淀川キリスト教病院理事長・柏木哲夫氏はこのように述べています。「命の問題は、医学だけの問題でなく、人間の問題であり、人間の問題なら、できるだけ専門や職種の違う人たちがチームを組んで判断する方が、間違いが少なくなるであろう」。

ホスピウムとは、まさに命の問題を、そして人間の問題を取り扱う場所なのです。

昨年、サマリヤ人病院の田崎理事長より「チャプレンとして看取りをしてくれないか」と請われ、寝たきりの患者さんたちを前にして何をどうすればよいか途方に暮れていた時、看護課長の「皆さん、耳は最後まで聞こえていますから、声がけをお願いします」という一言がきっかけとなり、今では月に一度、ボランティアの方たちによる病棟でのコンサートが行われるようになりました。

同時に、作業療法士や聴覚言語療法士なども専門家の立場で参加してくれるようになってきました。まさにこれも、患者さんたちのクオリティー・オブ・ライフ（QOL）——生活の質を高め、最後の時を豊かに過ごしてもらうという「人間の問題」を、専門や職種の違うチームで看るというホスピス、そして「客人をもてなす場所」としてのホスピティウム、宿屋の一つのあり方なのだと思います。

そしてこれは、ただ医療機関にとどまらず、魂への配慮の場としての教会、さらにはチャペルアワーをはじめ宗教活動を行うキリスト教文化センターを置く、ここ同志社大学においても同じことなのではないでしょうか。

病院も、教会も、そして学校も、実はこの善きサマリヤ人から、瀕死の重症を負った隣人を託された場所なのです。そして私たちは皆、宿屋の主人なのです。もちろん宿屋の主人には、あのクリスマスの夜のように、身重の妻を連れて宿を探す夫に、「満室です」と断ることもできるでしょう。しかし、それでもなお、傷ついた人、瀕死の人、皆から顧みられず打ち捨てられた人を預ける場所を求めて、サマリヤ人は宿屋の扉をたたき続けているのです。

3) 昇天のイエス — 帰りがけに払ってくださる方

こうして、宿屋の主人をイエスの問い「追いはぎに襲われた人の隣人は誰か」のもう一人の三番目の人物と考えるならば、では、このサマリヤ人とは誰なのでしょう。そう、もうお分かりでしょう。この善きサマリヤ人こそ、瀕死の旅人を見て、腸（はらわた）のちぎれるほどに憐れみ、近寄り、助け、寄り添い、宿屋まで運んだ主イエス・キリストご自身に他なりません。

ユダヤ人たちから「あなたはサマリヤ人で、悪霊に取り憑かれている」（ヨハネ 8:48）と揶揄されたイエス。飼う者のいない羊のような群衆を深く憐れみ、五つのパンと二匹の魚で養われたイエス。目の見えない人、足の不自由な人、皮膚病を患っている人、また心の病に苦しむ人に近づき、癒されたイエス。そして、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（マタイ 16:24）と毅然と宣言したイエス。

彼こそが、本当の「善きサマリヤ人」ではなかったでしょうか。

イエスは、宿屋の主人である私たち一人ひとりの扉をたたき、「あなたも行って、同じようにしなさい」と迫って来られるのです。

私たちは、誰も瀕死の旅人を見て、あの道の向こう側を通って行った祭司やレビ人のようになりたいとは思いません。しかし、日々戦争や災害、また凶悪な犯罪で苦しむ人たちの姿を見て心を痛めたとしても、そこを素通りしてしまう自分に気づくことがあります。

現実の世界の中で、「隣人であること」や「隣人となること」の困難さを、私たちはよく知っています。同時に、傷ついた見ず知らずの他人を宿屋に連れて行き、費用まで払い、足りなかったら「帰りがけに払います」などと約束する、信じられないほど度を越えたお人好しにも、自分になれるわけがない、と思うのです。

けれども、そんな時、サマリヤ人の扉をたたき音が聞こえてくるのです。二デナリオン銀貨を差し出し、「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います」（ルカ 10:35）という主の声が聞こえてくるのです。

私たちは、どんなに努力してもサマリヤ人のようにはなれないでしょう。律法の真髄である「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい」(ルカ 10:27)と唱えることはできても、それを実際に行うことは不可能であり、それはまさに「行いによる義」であり、まだ福音を知らぬ者の姿なのかもしれません。

それほど、隣人愛とは私たちの行いによっては実現不可能なことなのです。

しかし、イエスは私たちに「自分を愛するように、隣人を愛しなさい」と言って、傷ついた旅人を託されるのです。二日分の賃金である二デナリオンを渡し、「必ず帰ってくる」と約束して――。

4) ニデナリオンとニドル

ところで、このニデナリオンには、一体どんな意味があるのでしょうか。たった二日分の賃金を渡されて、宿屋の主人は帰りがけに払ってくれるサマリヤ人を待つことができたのでしょうか。

私はこのことを思うとき、モーセに率いられてエジプトを脱出したイスラエルの民のことを思い起こします。追手を逃れて荒野に入った彼らは、早速食べ物がないと不平不満を言いました。しかしその時、神は彼らにマナを降らせました。彼らは毎日、一日分だけを集めるよう命じられました。けれども、安息日の前日には、二日分のマナが与えられたのです。そして聖書は最後にこう記します。「人の住んでいる土地に着くまで、四十年にわたってこのマナを食べた」(出エジプト 16:35)と。

二日分のマナ――それは、「神が決してあなたたちを飢えさせはしない」という約束のしるしです。同じく、サマリヤ人が託していったニデナリオンもまた、「必ず帰ってくる」という約束のしるしなのです。

復活の主が弟子たちの見ている前で天に上げられた時、彼らはただぼんやりと空を見上げていました。しかしその時、声が聞こえたのです。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」(使徒言行録 1:11)。

再臨の主は必ず、私たちのもとへ帰って来られるのです。それまでの間、私たちは二日分のマナ、ニデナリオン銀貨を託された約束のしるしとして握りしめ、この世にあって主の業に励むのです。さて、最後にもう一つ、託された 2 デナリオンのことをお話して今日のお話を終えたいと思います。今年創立 150 年目を迎えるわたしたち同志社大学設立にまつわる新島襄の大変有名なエピソードです。大学のホームページにはこう書かれています。

「1874 年秋、米国バーモント州ラットランドのグレイス教会。新島襄は、この教会で開催されたアメリカン・ボード(海外伝道組織)の年次大会で、『日本にキリスト教主義の学校をつくりたい』という大志を感涙とともに訴えました。新島の話に感動した聴衆から次々と献金が寄せられました。その中には、年老いた農夫と寡婦からそれぞれ手渡された 2 ドルがありました。『これは私の持っているお金のすべてです。これをあなたの目的のために役立ててください』」

新島にとっては忘れ得ぬ出来事でした。こうして多くの人々に支えられて京都に生まれた同志社。創立者・新島襄は当時親交のあった勝海舟に「大学の完成には 200 年を要する」と述べたと伝えられています。遠い未来に思いを馳せた新島の胸中には、「日本を近代国家として牽引する人物を育

成したい」という壮大な願いがあったのです。どうでしょう。この農夫から新島に手渡された2ドル札紙幣こそが、あの約束の地を目指すイスラエルの民を養った2日分のマナであり、サマリア人が傷ついた隣人を介抱するようにと託した2デナリオンではなかったでしょうか。私たちに託されたもの、それこそがホスピティウム——客人をもてなす場所としての病院、教会、学校の働きであり、そこにいる私たちが隣人となることなのです。

5) 帰りがけに払います

私たちは皆、宿屋の主人です。それぞれに託された傷ついた旅人がいます。それは、文字通りの重傷人であるかもしれません。また、あるときは、志半ばの大学の完成という使命であるかもしれません。

しかし、どうか、それを横目で見ながら向こう側を通り過ぎてしまう者とならないでください。身重の若い夫婦を、門前払いにしないでください。

必ず、サマリア人は「帰りがけに払います」と約束してくれています。そして主もまた、再び私たちの前に再臨して下さると、約束してくださっているのです。

私たちは、託された2デナリオンをしっかりと握りしめ、目の前にいる隣人を愛していく者となりましょう。